

## 水の理論の系譜（三）

福 本 勝 清

前々稿（『明治大学教養論集』No. 476）、前稿（同 No. 485）において、主として、東南アジア、南アジア、そしてエジプトを含む西アジアにおける、灌漑・治水など水利事業と政治支配と関わりの歴史を、具体的に検証してきた。

本稿においては、中国史に関する水の理論について、その詳細を述べ、その意義について考察したい。

### 1 中 国

#### i 木村正雄

水の理論という呼称は、本来、ウィットフォーゲルの歴史理論、特に1957年以降の水力理論に対して用いられた。だが、水の理論と呼ばれるべき他の歴史理論が、中国古代史の領域に存在する。独特な「第一次農地」と「第二次農地」概念を駆使し、中国古代専制国家の生成を理論的に解明せんとした木村正雄の歴史理論である。木村正雄がその理論の骨格を提示したのは「中国の古代専制主義とその基礎」（木村、1958）においてであり、ウィットフォーゲルが『オリエンタル・デスポティズム』を発表した翌年のことであった。

木村は、中国古代において、土地私有がすでに存在していたにもかかわらず、専制主義支配、すなわち人頭的支配＝個別人身支配体制が如何にして成立したのか、その基礎的条件を明らかにしようとした。

原始農耕の始まった華北では、河流から離れた乾燥した土地は農耕に適せず、また、河身に近い低平なところは、洪水の害を受けるので、安全な農地にはならず、耕地として利用されたのは、河身には近いが、洪水の害を防ぎうるところ、河岸の小高い丘を中心とする若干の土地であった。邑制国家の農地の広さを限定したのは、根本的には、このような生産諸力の段階における治水・灌漑の可能性によるものであった。木村は、このような生産力の段階における上記のような農地を、第一次農地と呼ぶ。「邑とはこのような第一次農地を基礎に、小高い丘を中心に営まれた聚落で、防洪と関係してはじめて都市的密集的であり、多く土壁などをめぐらしたものと考えられる。そして某邑の田と呼ばれる第一次農地は、多くのこのような土壁の外にあったと思われる」(木村, 1958: p. 15)。

このような邑制国家の農地を支える治水灌漑機構は、比較的小規模であったが、当時としては、共同体農民の個々の力ではもちろんのこと、少人数では築造することも、維持管理することもできなかった。そこから、共同体もしくは共同体を越えた邑制国家のコントロールが招来せられることになる(pp. 15-16)。春秋から戦国時代にかけて、鉄器が普及し、農業生産力が高まるにつれ、土地の分割所有、すなわち私有が発生する。そして土地利用の不均衡化にもとづき「初税畝」(初めて畝に税す)段階にいたる。だが、その段階に至っても、農耕は水利機構の規制を脱却し得ず、従って水利機構は分割所有されないままであった。なぜなら「私有制が成立しても、そこにはギリシアなどのように複数の自由農民からなる市民社会を生む可能性はなく、1人による専制社会となるほかなかった。分割されない一つの単位治水水利機構は、結局、1人の占有支配に帰するほかはなく、他はその治水水利機構を媒介として、その占有支配者に従属することになったからである」(p. 16)。土地私有の成立と水利機構の非分割性が互いに矛盾した関係にあることを、木村はここで明らかにしている。また「こうして一つの単位水利機構ごとに小規模な古代的専制組織を生み、それら小専制者の有力者は次第に他の治水・

水利機構をも専有支配するようになり、春秋末には数邑の支配者ができ、遂に中国は戦国の所謂七雄に分割支配されるようになったのである」(p. 16)、と述べ、この小規模な専制組織が内包する拡大傾向についても指摘している。

では、第二次農地は如何にして成立するのであろうか。やはり主役は小規模専制組織の後身・戦国七雄であり、彼らは「各々自己支配下の集团的労働力を投入し、鉄製土木工具を使って新しい大規模水利機構を設け、これまで放置された荒蕪地・低湿地を開拓した」(p. 16)。これが第二次農地であり、木村は、これによって領域国家の基礎が成立したと述べる。「そして中国が遂に秦を中心に統一され帝国時代を現出するに至る間には、このような新しい大規模治水水利機構と第二次農地が大きな役割を果たしたこと、後述の如くである。従って戦国時代<sup>1)</sup>以後においては、君主の専制的支配は、結局治水水利機構の支配を通じて行われたといえることができる」(p. 16)と、第二次農地と統一帝国成立の関りについて述べている。

以上によって理解できるように、実は、第一次農地において、すでに専制の萌芽が存在することが明確に指摘されており、興味深い。このような論理からすれば、治水灌漑機構を専有するものの手による、大規模な治水灌漑の開設による第二次農地の造成とは、少なくとも、春秋戦国の交代期には始まっていたということになる。すなわち、西門豹或いは李悝の、灌漑工事は、すでに第二次農地の造成であったのである。木村は、第二次農地を秦漢期の新県設立に結びつけ、黄河下流域を舞台にした大規模水利事業の展開を秦漢統一国家の専制体制樹立に繋げている。この構想の雄大さが、木村をして中国古代国家論の雄ならしめたといえる。だが、上記の木村の論理によれば、春秋期にすでに、個々の小水系において、専制が萌芽的に成立しつつあったことを考慮すれば、それが戦国期に、七雄それぞれにおいて、灌漑・治水事業を展開しつつ、専制の強化が図られたことをもって、すでにこの水の理論は実証されたと理解すべきであろう。

戦国七雄に代表される専制国家群が如何にして統一帝国を生むにいたった

かということをも、木村はこの理論によって証明しようとした。第二次農地は、その開発のみならず、その維持にも国家的統一権力の存在と干渉を不可欠にした。何故なら、第二次農地を支える治水灌漑機構は、その規模があまりにも大きく、その維持は、個人や小集団の力を超えたからである。そこに黄河独特の自然条件が存在した。「黄河やその支流は『一石水にして其泥数斗』といわれたように、極めて多くの泥を含んでいた。そこで、放任すれば、河底はたちまち高まり渠は数年ならずして埋まった。そうなると堤防は相対的に低くなり、渠は老衰して機能を失った。それを防ぐためには、毎年決まった時期に河川や渠を浚渫し、堤防を修理する必要があった。これは大事業であって、国家の統一権力の手にまっほかなかった」(p. 19)。

このような第二次農地の性格は、逆に統一王朝の弱みをも含むものであった。すなわち、第二次農地の維持管理の失敗が直接、政治支配の安定を損ない、最終的には王朝の崩壊をもたらすことになった。戦争の発生や長期化、政治の荒廃などにより、数年間浚渫が怠られると、流域はたちまち洪水がおこり、また旱魃に見舞われた。「こうして王朝末期にはきまって洪水や旱魃がひん発し、統一政権の崩壊と共に第二次農地の大部分は荒廃した。その農耕を支えている治水水利機構が老衰し、または崩壊する結果、生産力はゼロに近くなり、そこでは当然にも相対的人口過剰即ち飢饉がおこった。人民は死亡するか、他地方に流亡するほかはなかった (p. 19)。すなわち、王朝末期の農民反乱の原因こそ第二次農地の崩壊であった。

かくして木村理論は、専制国家の成立の理論であるばかりでなく、中国古代統一国家の成立——さらに崩壊と再成立——をも理論的に導き出そうとするものであった。だが、第一次農地において、すでに専制の萌芽が存在する以上、第二次農地創出に関わる専制国家の成立は容易に導き出せる。第一次農地成立において、専制の萌芽が出現するがゆえに、強化された王権は、第二次農地造成への積極的なイニシアティブをとり得る、そう考えることができる。

しかし、統一国家成立が可能であるかどうかは、本来的には専制とは別の問題である。その後の中国の分裂期のそれぞれの分国がつねに専制的であったことを想起されたい。専制国家は往々にして複数の大河流域を包括する大帝國を出現させる。それゆえ、混同しやすいのは無理がないとはいえ、本来の「水の理論」から直接導き出されるのは専制であって、統一国家ではない。すなわち、木村理論からは、黄河流域——主要には中・下流域——を包括する専制国家の成立を導き出すことができるだけであり、全中国を版図とする統一国家としての中華帝國の成立は、その後の歴史的プロセスを通じて達成されたのである。

おそらく、木村理論の形成に、ウィットフォーゲルの右傾化（反共化）が大きく影響しているのであろう。木村はウィットフォーゲルの水力理論とは異なり、第一次農地、第二次農地といった概念によって、自らの水の理論のなかに、中国古代国家生成における発展的契機といったものを組み込みたかったのである。

上述のごとく、邑制国家の政治・経済システムのなかに、すでに専制の萌芽が存在していた。言いかえれば、水によって支えられたアジア的な土地所有は、専制を潜在的に内包しているということになる。第一次農地によって専制が萌芽的に成立し、第二次農地の展開の中から専制国家が登場したと考えるべきであろう。ここで強調されるべきは第二次農地の存在が、専制からの離脱を難しくしたという点である。アジア的社会において、勸農権を地方豪族が中央政府から奪い返し、それとともに村落共同体が再び治水灌漑事業の主体となっていく場合、専制国家からの離脱は可能となる。だが、それには規模の問題が立ちはだかる。大河の治水や大平原の灌漑を村落レベルで担うことは不可能である。一般的に言えば、アジア的社会にそのようなチャンスがめぐってくる可能性は極めて少ないといえる。

木村は、第二次農地にもとづいた中国古代専制国家の社会構成を齊民制と呼んでいる。齊民制は古典古代的奴隸制と対比された隷属のシステムである

(木村, 1959)。木村がこの区別にこだわるのは、①古典古代社会が土地私有権に基礎をおき、複数の市民が、社会の主たる階級を構成していたのに対し、中国はそのような自由な市民は成立せず、唯一絶対的な存在である皇帝が存在し、その分身たる官僚が皇帝の機能を分任し、国家機構を構成していたこと、②古典古代の奴隷は、市民に所有され、人格を認められず、家族構成権も所有権も持っていなかったのに対し、中国古代における直接生産者は、良民(齊民)であり、家族を構成し、土地を所有する権利を認められていたこと(木村, 1959: p. 15)が理由であった。木村はこの齊民が、所有権こそ持っていたが、生産の自主権を持たず、一律かつ直接に、国家の規制支配を受けていたことを強調している。そこに、齊民制と古典古代奴隷制を対比する理由があるのであろう。だが、この齊民制は隷属システムとしては奴隷制に対比しうるものではあるが、奴隷制ではない。それは、総体的奴隷制が奴隷制ではないのと、同じ理由からである。

木村正雄の水の理論は、その後、彼の二つの大著『中国古代帝国の形成』(1965)、『中国中国農民叛乱の研究』(1979)の刊行によって、さらに具体的に展開されることになった。前者は、秦漢帝国期における郡県制の諸県を、第一次農地に基づく旧県と、第二次農地の上に築かれた新県との対比から、旧県を邑制国家以来の政治的自立性の高い地域、新県を国家権力に開設され、維持管理される水利機構に依存する地域とみなし、この新県こそ、古代における中央集権的郡県制の基礎となったものとみなすものであった。

後者は、前著を踏まえ、王朝末期の第二次農地の崩壊と農民反乱の勃発の関わりを具体的に論じたものであり、何故、王朝末期に大規模な農民反乱が起こるのか、さらには反乱軍のそれぞれがどのような農業生産構造に依拠しているのかを明らかにしたものである。ともに、スケールの大きな理論的展望を提起している。

## ii 佐久間吉也

木村正雄の水の理論の発表は、中国古代史ばかりでなく、中国史研究全体に大きな波紋と刺激をもたらした。1960年代以降、秦漢以前から清代に至るまでの、政治支配と水の関わりに関して、あるいは水利に関して、多くの文献的、実証的研究の成果が発表され、互いに競う合う諸家により研究の蓄積がなされている。秦漢帝国に続く魏晉南北朝期をフィールドとしていた佐久間吉也も、木村理論の影響を受けた一人であった。

佐久間吉也『魏晉南北朝水利史研究』（1980）は灌漑・治水のほか、それ以外の水利、たとえば、水旱災とその応急対策、漕運とそれに必要な運河建設を含めて、魏晉南北朝期の水利を論じている。筆者はここで、佐久間が水利史のなかに、水旱災への応急対策に加えて、漕運、さらに倉に代表される共同の備蓄を含めて論じたことを高く評価したい。

筆者が以前から述べてきたように、灌漑・治水は、共同体のための賦役労働を徴集・指揮して行なわれる。堰や水路、そして堤防などの水利施設の築造には共同体農民が、あるいは国家の公民・良民が大量に動員され、また、その維持管理においても多数の農民が動員され、王の代理人あるいは官吏の指揮のもと働かされ、そうしてのみようやく長期にわたり持続することが可能となる。また、アジア的な社会における王都への主穀の搬送である漕運も、共同体のための必要労働、賦役労働によってなされた。というのも、土地と水が王のものである社会においては、収穫物を王へ奉獻するのは当然であり、王都への搬送もまた、理念としては（実際の搬運については可能不可能を具体的に検証しなければならないとはいえ）、共同体農民の負担によって行なうものとされた。

ただ、魏晉南北朝期は、統一王朝が崩壊した後の混乱期であり、そこにおける権力の在り方、国家の在り方に関して、統一王朝期との相違をどのように考えるかが問題となる。たとえば、三国時代、呉の会稽太守車浚は、飢民

を救うため、備蓄を納めた倉庫を開こうとして処刑されるが、それについて、佐久間は「会稽太守車浚にまつわる事件は、郡にある倉庫を開く権利は、呉帝の手中にあったことを示すものである。つまり郡倉の管理権即ち開倉権は専制君主の手中にあって、郡太守は勝手に倉庫を開くことはできなかったことを示している。このことは専制君主の権力が直接に民衆に及んでいたことを示すものと考えられる」(佐久間, 1980: p. 109) と述べている。すなわち、郡の倉およびそこに備蓄された物資は共同体のための賦役労働によって築かれ、蓄積されたものである以上、倉は共同体を代表するもの(帝や王)に属する。民への賑貸は、民の父たる帝もしくは王の贈り物(賜物)であり、地方官衙の長が主導することは、私恩を施こし、帝に替って民心を掌握せんとするものと疑われたのであろう。この部分においては、たとえ分裂期の王朝といえども、治政において統一期のそれと異なるところはない、ということがはっきり示されている。

さらに、佐久間は晋代の水利官に関して、灌漑施設や漕運路の形成を推進した者が、どのような官職にあったかを表にした後、次のように述べる。「地方官兼將軍の場合がもっとも多く、灌漑関係が五名で、漕運関係が四名である。次が地方官で灌漑関係三名、漕運関係三名である。地方長官は軍号を持つ持たないに拘らず、州郡国の水利関係について責任を負わされていたのである。水利官としては陳狼の都水使者一名である」(pp. 280-281)。さらに、佐久間は政治機構の上での水利関係の官職について考察し、晋代の水利を司る官職や官衙が系統的ではなく、実権も漢代より低下していることを指摘している。

このような指摘は、魏晉南北朝期の分国、分権化に関わることがらであり、この時代の性格規定に関わる問題を孕んでいる。だが、灌漑にせよ、漕運にせよ、膨大な夫役を集めなければならない。また農業生産に可能な限り影響がないようにするため、夫役の徴発に、優先順位をつけなければならない。そのような意味で地方長官兼將軍が、官職として、適任であろう。また、互



いに領土を争う分国的な状況において、まず、民心を掌握すべく、民生の安定を図らねばならない。そのような危急時に、前線を担う軍政の長に、水利を統括させるのも、また、当然というべきであろう。

木村正雄『中国古代帝国の形成』（1965）は、長江流域以南の地方に関して、「気候が比較的湿潤で、その開拓は氏族や家族などという小集団でも可能で、従って北シナのように、国家権力を背景とするような第二次農地はそれ程広くは形成されなかった。農地はいわば至るところに蚕食的に開拓される可能性があり、聚落も散村的でありえた。従ってこのような農地に基礎をおく聚落や県は、それ自体自立的で、国家権力に依存する性格は少なかった」（木村、1965: p. 776）と述べ、さらに華北とは違った天水農耕の可能性が、その農地の自立性を高めたことを示唆している。

おそらくこのような木村正雄の江南に対する見方が、佐久間の判断に影響を与えているのであろう。佐久間は、南朝の国家構造に関して、「確かに黄河流域に形成された巨大な国家権力に比すべきものは生じなかったが、水旱災発生の場合をみると、とくに長江流域における災害は多く、少なくとも国家権力による治水灌漑の整備が必要であったと考えられる」（佐久間、p. 457）と述べ、さらに、それら水旱災の応急対策として、大土地所有者の徐耕による米千斛の供出（宋朝）が行われたことや、税役減免の詔がだされている（梁朝）が、その実効が見られないところから、王朝権力が末端にまで浸透していないことを示すものであるとし、「つまり南朝において専制君主体制が弱体化しつつある傾向がみられる」（p. 477）と判断している。

佐久間は、魏晋南北朝期の水利と政治支配の関わりについて「大勢として、南朝時代は古代デスポティズムの範疇に入ると考えられるが、封建制への傾斜がみられる場合がおこっている。国家権力を背景にして形成された灌漑地域において、その工事の責任者である将軍・刺史・太守等で、またその子孫や一族が大土地を集積し、隷属者を従え、世襲が行われているのである」（pp. 518-519）と、同書の最後でまとめているが、残念ながら、大勢の把握

として誤っている。水利事業の主体が、国家ではなく、地方の軍政の長や、地方官衙の長、そしてその一族に移っていくとの把握から、歴史的趨勢としての封建制への傾斜を抽出している。当時の歴史観を反映しているのであろうが、日本史になぞられた概念把握、あるいは「世界史の基本法則」をなぞることから抜け出せていないといわざるをえない。

### iii 吉岡義信

隋唐時代は黄河の河道が比較的安定していたと言われる。だが、宋代以降、黄河はその荒ぶる川としての本領をいかに発揮するようになる。吉岡義信『宋代黄河史研究』(1978)は、宋代における黄河の治水と政治支配との関わりを詳細に追ったものとして、注目されるべき著作である。

吉岡は、その序論において、彼の北宋期黄河の治水に関する研究が、ウィットフォークルの「治水文明論」に沿い、それを具体的な歴史の場において検証しつつ、議論を深めたことを明確に述べている。本書が出版された1978年は、まだ、ウィットフォークル・パニックがおさまっていたとは言い難い時期であり、序論において、学ぶべき対象として、はっきりとその名を挙げた勇気を称えたいと思う。

吉岡は、第一章第一節の冒頭で「宋代の黄河は歴代稀にみる多くの問題をかかえていた。とくに仁宗の慶暦八年(西暦1048年)澶州商胡埽の河決によって、過去一千年東流していた黄河が北流して新局面を迎え、加えて北方諸民族の動きは、宋朝自らの体質改善を余儀なくし、ここに王安石が新法を強行した。黄河治水問題は新法党の水利積極策に乗じ、国防と党争のなかに紛糾を極めてくるのである。繰り返す決壊とその治水には、河北北方六路の人と物とが投入され、国家の政治経済社会に、多大の影響を及ぼしている」(吉岡, 1978: p. 11)と概括し、北宋期における黄河の治水(河防)が、政権をめぐるあい争う党派の抗争、および北から国境を脅かす遼との外交問題、国防上の問題ともからみ合っていたことを述べている。

黄河の自然、治水技術、宋代の河役と河工など、黄河河防上の具体的な諸問題を多岐にわたり丁寧に追っているが、黄河の治水機構、治水政策を論じた部分がもっとも興味深い。たとえば治水機構における最上位の官、都水監の官僚としての地位は決して高いものではなかった。「しかし程昉の例で知られるのであるが、事実は皇帝・宰執、それに連なる水官が実権を握っていたのである」。水利を司る官衙は一系統だけではなかった。また、水利工事のための役夫の動員、資材の調達など、それらの役割は多数の官衙にまたがって配分されていた。それゆえ『未だこれを専一にする者はなかった』のである。これを専一にする者は、ひとり皇帝であり、その権威を仮る宰相であり、水官のみであった。程昉は『同管勾外都水監丞』という肩書のみで、都水監を闊歩できたのである」(p. 339)。

治水機構は系統だった組織とはいえなかった。また、治水・河防に関わる諸官衙も系統的に指揮されてはいなかった。だが、そのことは、むしろ、中央に、より正確に言えば、皇帝や宰相、あるいはその庇護や寵愛を受けた少数の水官に権力の専攬を許すものとなっていた。水官は水事に習熟したものであったことは勿論であった。だが、彼らが水利において力をふるうためには必ず中央の勢力ある者の支持を必要としたのである。吉岡が、水官と執政府との関係は、「人間的な因縁を認められはするが、行政上の統属関係は認められない。朝廷に直属しているのである」(p. 356)と述べるのも、そのことを指している。そこから、本来は新法党の人であった李偉や呉安特といった水利官僚が、旧法党政権のもとでも、その重鎮たちの支持を受け、黄河治水を推進しえたことも理解できる。重鎮たちには、国防上の観点から、黄河東流を維持せざるを得ず、そのために確かな実力をそなえた水利官僚を手づけておかねばならなかったからであろう。

吉岡は、政争と治水政策のからみ合いの歴史を、次のように締めくくっている。「都水監官僚機構は、王安石の新法治下に発展し、元豊正名に至る間に整備強化拡充が計られた。都水監はいわば新法党の一拠点であった。都水

監の現場下級官僚である程昉が、宦官的な特質を発揮して、都大提挙官振りを、縦横無尽に発揮して、北流する黄河を東にかえし、しかもその上に治水の目的である利水を果たしたその偉業は、正しく王安石のいう如く、秦以来第一の黄河治水官であるということが出来るであろう。その手法はそのまま呉安持・李偉に受けつがれたとみることが出来る。しかしすべては黄河の威力の前に屈服した」(p. 357)。程昉、呉安特、李偉などの治水官僚は、何故、そのような大きな力を発揮出来たのであろうか。再び吉岡は言う「こうした身分、官位の低い治水官僚が、その持てる才能と技能とを充分に発揮できたのは、その背後に強力な専制支配権力をもつ皇帝と執政大臣官僚が控えていたからである。しかしすべては黄河の威力の前に屈し去った。黄河は依然として北流しつづけるのであった」(p. 357) と。

吉岡は、河防への多大な努力にもかかわらず「すべては黄河の威力の前に屈した」と繰り返し述べている。北流する黄河を東流せしめようとしたのは、遼との国境をどのように構築するかとの国防的な観点からの強い圧力の存在であった。同書は北宋における河防政策と新法党・旧法党の抗争に代表される政治抗争のからみ合いを詳述しているところに、やはり精彩があるが、そこから、かえて、河防のために動員される大量の数の農民との対比が鮮やかに浮かび上がってくることになる。

黄河改修、あるいは河防への動員は、頻繁に、しかも広範囲に行われた。大河だけに小規模な治水工事とはいえ、役夫、5千、あるいは1万を集めることは稀ではなかった。「普通大役の労働力は五万を降らず、平均一〇万内外の人員が動員されている」(p. 289)。また、堤防などの修築のための資材の供出も、重い負担であり、かなり遠方の州県まで供出を命じられた。動員は一般に農閑期に行われたが、工期が延びれば、春耕に間に合わないこともあった。また、難工事の際には、役夫が死ぬ危険性があった。澶州孫村口の役(1088年)においては兵士逃走3,691人、死損1,319人が出たとあり(p. 172)、治水工事はまさに苦役であった。

夫役や建設資材の供出は、決壊した地域にだけ求められたのではなかった。それよりはるかに広大な地域に対し供出が命じられたのである。官衙の命により、ただ重い負担だけを押し付けられる農民のなかには、できるかぎり負担を逃れようとするものが出てくるのは当然であった。金や力あるものは、負担を貧しい農民に押しつけた。国家による大規模な水利事業は、それに動員される農民の意志とは、ほとんど無関係に、行われることになる。だが、動員を命ぜられた農民たちにそれを拒否する自由などなかった。村落の農民たちはやむをえず、負担を回避し、負担を互いに押し付け合う間柄に陥らざるをえなくなった。筆者はそこに、中国の村落がけって共同体ではありえない大きな要因をみている。そして、このような村落の体制は、秦漢帝国期にはすでに定着していたと考えられる。すなわち、コミュニティの意志とは無関係に、大規模公共事業を行なうような社会、つまり専制国家のもとにおいては、村落は共同体ではありえない。そこに存在するのは、費孝通がいうような、差違や序列があるがゆえに、互いに結びつき合う村民の関係、「差序格局」である。

村落における差序格局の成立は専制体制と不可分の関係にある。専制主義的な政治システムは、戦国期に形成され、秦漢帝国において確立した。同時期、農村共同体もまた解体されたとされる（渡辺信一郎，2010: p. 26）が、差序格局はその共同体が解体された村落の上に成立したと考えることができる。

#### iv 長瀬守

上記吉岡義信と同じく宋代の水利を論じたものに長瀬守がいる。また、長瀬は合わせて元朝期の水利をも論じている。長瀬は主著『宋元水利史研究』（1983）の「序」において、ウィットフォードの水の理論が日本の戦後研究に与えた影響の大きさを指摘しつつ、次のように述べている。「ウ氏は戦後『東洋の専制主義』（アジア経済研究所訳，論争社，昭和36年）を発表し、

戦前の研究に対しさらに詳細な理論的補足をなした。木村正雄氏『中国古代帝国の形成』（不昧堂書店、昭和40年）の理論もウ氏の理論を継承発展させたものであり、第二次農地形成が帝国形成に大きな役割を果たしたことを指摘された。これにはウ氏の水の理論の欠陥とも通じる問題点があり、天野元之助氏の指摘されるように、それは旱地農法への軽視である」（長瀬、1983: p. 9）。

すなわち長瀬は、ウィットフォーゲルおよび木村正雄の水の理論の弱点である、旱地農法の軽視に対し、その弱点を補強することによって、より合理的で、東アジア、東南アジア世界に通じる、文化と社会を繋ぐ水利社会論を作り上げようとしている。それゆえ、長瀬がもっとも関心を寄せているのは、ウィットフォーゲルや木村正雄のような古代専制国家の成立ではなく、東アジア水利文化圏の形成である。その文化圏には、華北・江南を含めた全中国、および日本や東南アジアが含まれ、全体としてその農業の特質は、水利農業であると主張する。

天野元之助のいうごとく、華北においては早くから、賈思勰『齊民要術』の成立に象徴されるように、少なくとも南北朝期には、旱地農法が成立し、水を節約した畑作農業を行っていた。旱地農法の成立を代田法の普及期（前漢）とみなす見解も有力であり、それゆえ、ウィットフォーゲルや木村正雄の水の理論の妥当性に対する有力な批判となっている。華北の旱地農法も含めて東アジア水利農業文化圏に属する水利農業であるとする長瀬の構想は、有意義なものであった。農業技術、犁耕、輪作体系、施肥そして労働力と労働編成、華北農業と江南農業の違いなど、長瀬の関心とその記述は多岐にわたる。さらには当時の政治家とくに王安石の水利思想や、優れた水官であった郭守敬や賈魯の水利学に関しても興味深い記述が多数述べられているが、ここでは、理論的な部分に集中して議論したい。

長瀬が、東アジア農業に共通するものとしてあげるのが、手耨（手作業）を主体とするということである。「ウ氏の論理は手耨＝労働力問題に還元できる。その基底には水利社会が存在していると私は考える。それは天水をこ

えたもっと広汎な且つ複合した水利を基底にもつ社会であり、華北・江南を含めた中国地域、日本、東南アジアを含めて一つの共通性をもつエリアを考える。それを水利文化圏と規定し、新しい視角で一つの特質を究明したのが『東アジアにおける水利文化圏の特質』論である。ここでは水利文化圏を形成するいくつかのファクターをあげ、その重要性を究めることが却って東アジアの特質——水利社会——を浮き彫りにすることができる所以を強調した」(p.11)と、長瀬は述べる。

ウィットフォーゲルが戦前の主著『解体過程にある中国の経済と社会』あるいは『東洋的社会の理論』において、アジア的社会における農法の特質として、灌漑・施肥・組合せ耕種法・鋤耕の四つをあげ、それらが相互的に有機的連繫を保ち、これらは農業生産過程における労働期間の異常な拡大を要求し、極度に労働密度の高い集約農業の成立を指摘していることに関して、長瀬は「このことは今までの歴史研究の間では軽視され易く、ウ氏の理論は、水の理論即東洋的停滞論という形で安易にうけとめられていたようである。すなわち、水田社会の基礎となる水稻は、作物分類学の立場からいうと中耕作物（または中耕除草作物）といわれるものである。この中耕作物は、西洋農業（ここでは非中耕作物）とアジア農業（ここでは中耕作物）の自然環境的差異を端的に示す指標ともなっている。中耕作物というのは、極めて手間のかかる農作業を必要とするし、非中耕作物は手間のいらぬものであると、規定している」(p.27)と述べ、先ほどの手耨を中心とした農業を、アジア的農業の西洋農業への相違点として提示している。

さらに長瀬は、手耨や中耕を中心とした農業の観点から、「このことはアジアにおける多量の労働力投入を『人海戦術』とよぶ語感の中にも現れているが、ウ氏によれば、『生産された生産手段』の意義が後景に退き、『自然生的生産用具』(土地・水)の役割が極度に発達する。ということは同時に、労働力の無双の発展に対する『労働器具の未発達』という構造を形成したと指摘している」(p.28)と、議論をつけ加えている。このすぐ後、長瀬は、

一頃（百畝）に要する水稻の労働投下量が、他の作物に比べ群を抜いて高いことを述べている。だが、アジア的農業における主要穀物は、水稻とは限らない。人海戦術がことに江南に多いわけでもない。また、東南アジアから中国を経て日本まで、米や麦ばかりでなく、粟やキビを耕種していても、東アジア的な農業でなくなるわけではない。さらに、人海戦術云々について言えば、たしかに手耨に頼る農業の影響を指摘できよう。労働生産性を重視せず、ただ土地生産性のみこだわった農法が労働の浪費とも思われる人海戦術を生んだともいえよう。だが、人海戦術にもっとも緊要なものとしては、働き手を集め、それを一か所または数か所に投入し、人手の多さに頼って（省力化もはからず）、公共事業を行っていた権力の存在こそ、問題にしなければならない。まさに、水利をめぐる工事の負担、夫役を誰がになっていたのかということであり、それを駆使していたのは誰かという問題である。

長瀬は吉岡義信（1978）の黄河史研究の主要部分が水利役の詳述に偏っていることを批判しているが（長瀬，1983: p. 11），それはやや論点を違えているように思われる。すなわち、吉岡はやはりウィットフォールゲルや木村正雄らの専制国家論の枠のなかにおいて、水利を論じていたのであり、大量の農民を動員し、それを指揮し、河防のための事業を行なうというのは、権力論の問題であり、議論の中心とならざるをえなかったのであろう。

もちろん、長瀬もまた治水事業と国家機構の関わりについて、何度も言及している。また、「このように宋代の官制では、治水事業について官の力はかなり末端機構にまで反映されるように、そのしくみがなされ、後述する労働力の徴発もこのしくみの中で行われ、黄河治水という共通の利害のために、すべてが統合されて、公権に直結していた」（p. 204）と述べ、さらにその要因として「治水事業の如きは個人の力では如何ともし難いもので、しかも災害をうけるときは、その地域が広範囲に浸され、人も物も無に帰することは、単に個人や地域集団の問題にとどまるものでなく、巨視的には国家の問題にまで還元され、拡大されてくる。これが治水＝公権への直結の要因であ



る」(p. 204) と論じており、決して論点のツボをはずしているわけではない。ただ、吉岡との対比でいえば、問題をあつかう関心の軸が異なること、観点の相違が存在するのであり、そこに吉岡と長瀬の著作のそれぞれの特質が存在するのである。

長瀬はさらに征服国家である元朝においても、同じように水利について関心が払われていたことを述べる。「華北は主として畑作地帯が中心であり、灌漑も畑作に行われ、雨水の少ないときは旱害となって農民生活を不安におとしいれ、生産は低下し、政治的基盤も不安定になる」。「これを救うため、政治的には免租を、経済的は水利灌漑施設をつくり生産を確保するという措置が必要になってくる。ここに治水・利水事業が国家権力によって行われる意義がある」(p. 286)。長瀬は、元は異民族であるがゆえに、歴代王朝以上に農民に対する関心、保護が強くなされた可能性を指摘している。1964 年、国際的なアジアの生産様式論争の切っ掛けをつくったヴァルガ論文以降、支配者（王や皇帝）の農業への関心そのものが、アジア的な響きを持つことが指摘されている。西欧の諸王は、農作物の豊凶に責任を負うことはない。それはまず気候のせいであり、最終的には神に帰すことがらである。その意味では、元朝の諸帝もまた典型的なアジア的国家の君主であったといえる<sup>2)</sup>。

## v その他

以上、瞥見してきたように、木村正雄の両大著刊行後、中国史における水に関する著作、論文が多数発表され、優れた著作にこと欠かない。単著としては、上記の著作のほかに、谷光隆『明代河工史』（1991）、森田明夫『清代水利社会史研究』（1974）、『清代水利社会史の研究』（2002）など労作が続いている。だが、紙幅の関係上、これ以上触れない。ただ、谷光隆（1991）に清代の治水家靳輔に関する評伝（侯仁之著）が翻訳・付載されている。そこに、靳輔を重んじた康熙帝の、自分が政務に関わって以来、三藩・河務・漕運をもって三大事としていた、との言葉が伝えられている（谷、p. 571）。

三大事のうち、河務すなわち黄河の治水および漕運、すなわち二つまでも水に関わるものである。この康熙帝の言葉をどのように解するか、いろいろな見方があるが、水が依然として国家の大事であったことが理解できよう。

これまでは、ウィットフォーゲルもしくは木村正雄の理論的提言を肯定的に受けとめてきた研究者の労作を紹介してきた。だが、ウィットフォーゲルや木村正雄の水の理論に対しては、古代史研究者に強力な反論、否定論が存在する。小島茂稔(2009)は、木村説に対しては、中国古代において灌漑農法がそれほど必要されていたかという疑問が夙投げかけられていたことを述べ、その注において、原宗子(2005)、藤田勝久(2005)、浜川栄(2009)の名を挙げ、中国古代における国家形成に大規模治水建設が必須であるという見解は否定されつつある(小島茂稔, 2009: p. 6)、と結論づけている。これが、現在の中国古代史研究者の大方の意見かとも思われる。

まず、藤田勝久の批判の骨子は、古代国家成立初期に全国的な水利官による組織は見いだせず、そのため、国家が「統括的な水利組織」によって農民の再生産に直接関与するという形態もありえない(藤田, 1983)というものである。浜川栄は、この藤田の実証により、「全国規模での治水・水利機構が前漢末にようやく整備されたことは疑いないようになくなった。これにより、中国古代デスポティズム成立の基礎条件に全国的治水・水利機構の存在を想定したウィットフォーゲルや木村の理論は崩壊したといつてよい」(浜川, p. 28)と断定する。そうであろうか。あまりにも、表面的な字句に捉われた批判ではないかと思われる。我々は、文革期に全国的な政府機構および党機構が瓦解するなか、毛沢東の独裁(「無産階級專政」)が強化されたのを見てきた。また、先ほどの吉岡義信の北宋期の黄河史研究のなかで、水利機構は必ずしも系統的な組織ではなかったことを見た。だが、それが皇帝に直属する中央の専横を保証していたのである。ウィットフォーゲルおよび木村正雄の水の理論においてもっとも重要なことは、専制国家は如何にして生まれたのかを問うことであり、彼らの理論的なあげ足をとることではないのだ。

もし、水の理論への批判が、大規模水利への必要が中央集権的な専制国家を成立せしめたのではなく、実際には中央集権的な国家の成立が大規模水利事業を可能にしたのだ、というのであれば、筆者には、妥当な批判だと思われる。だが、それは、水の理論が崩壊したということの意味するわけではない。1957年、ウィットフォーゲルの大著が刊行され、関係する諸学界は大きな衝撃を受けた（ウィットフォーゲル・パニック）。その著作の政治的なメッセージがあまりにも強かったがゆえに、ウィットフォーゲル「水の理論」の批判のほとんどは、彼の理論的弱点をそのまま突くものであった。すなわち、大規模水利事業を営むためには、すでに権力が一定程度集中していなければならない、それゆえ国家および国家機構の成立が先であり、大規模水利事業はその後からなされたとするものである。だが、ウィットフォーゲルが死亡し、彼の批判的矛先であった社会主義圏（ソ連圏）が崩壊した1990年代以降、ウィットフォーゲル批判の在り方は変化してきている。あるいは、1990年代に、水利史に関わる著作が次々に出版されるようになったことを考えれば、実際の研究、フィールドワークが進行中の1980年代には、すでに、ウィットフォーゲル仮説をそのまま受け入れなくとも、少なくとも、政治支配と水との間には大きなつながりがある、ということを認める雰囲気生まれつつあったと思われる（後述）。また、アジア的生産様式論支持者や理解者のなかに、大規模水利が先か、それを可能にするような権力の集中が先かの議論は、卵が先か鶏が先かの議論と同じく、意味がなく、相互作用論に立つべきだと考えるものも出てきている（Worster, 1985）。筆者が、木村正雄の水の理論の中における、第一次農地にもとづく国家のなかに、すでに専制の萌芽が存在することを木村が認めていることを重視するのも、それゆえである。

また、それが、一連の水の理論に対する批判への答えにもなっていると考える。すなわち、専制を生むのは必ずしも大規模水利事業の必要性だとは限らない、ということである。邑制国家のような規模の小さい国家においても、

君主は水利事業展開のために農民に賦役を命じたであろう。良民もしくは公民に労働を強制する、それが専制の萌芽だと考える。後は戦国時代以降の郡県制の展開のような具体的な歴史プロセスの問題である。また、浜川は乾燥地帯における灌漑が必ず重大な塩害を引き起こすことを強調している。だが、古代における華北がどのようなエコシステムのもとにあったのか、いまだはっきりしない。また、たとえ古代華北が現代のように乾燥していたとしても、メソポタミアのように華北などよりももっと高温で乾燥した地域においても、数千年間、塩害と悪戦しつづき、灌漑を行ってきた地域もあり、塩害の可能性をもって、古代華北における灌漑の重要性の否定や無効性には繋がらないと考える。ましてや、「過剰な灌漑による塩害の発生を伝える史料もない。したがって、歴史上の灌漑機構において塩害があったことを明証することはできない」と浜川自身が述べていることみれば、いっそうその感が強い。

木村理論に対するもっとも本質的な批判は、天野元之助(1958)から提出された。木村説が天水農耕を無視していることへの批判である。その含意は、華北農業が主要には天水農耕であり、その技術的基礎は旱地農法に依っているとの指摘であり、それゆえ灌漑農法は、華北農業の主要な形態ではなく、したがって古代文明の基礎となりえないとなる。原宗子の水の理論批判は、この天野元之助の批判を継承したものである。彼らの批判は重たい批判であり、ウィットフォードおよび木村正雄の二人の水の理論の根本をついたものであると考える。

だが、アジア的生産様式論にせよ、水の理論にせよ、1920年代後半以降、つねに重大な批判を浴びてきており、そのこと自体、普通のことであった。古代史研究者ではない筆者としては、この領域(中国古代史)について、さらなる研究の進展を気長に待つ以外ないが、ただ、次の幾つかの点を今後の留意点として挙げておきたい。

第一は、中国史において初期国家が成立した時期、あるいはその前後において、如何なる自然環境にあったのかについては、まだ不明な点が多い。鶴

間和幸（2007）は、「中国文明を生み出した自然環境は時とともに変化するものであり、現在の自然環境が古代と同じではないことには異論はない。古代の黄土高原は現在よりも温暖湿潤で、森林が繁茂した緑の平原であったとも見られている。その地を多大な人口を養うために開発した結果、自然環境が変化してきたのである。森林があれば、降水はいったん地下に浸透し地下水となり、徐々に河川に注ぎ込む。森林を伐採すれば、降水は表面の黄土を押し流し、河川に直接注ぎ込む。当然河川の土砂の量が増え、黄濁度も増すことになる。古代の黄河は黄河とは呼ばれておらず。河あるいは河水といった。唐代から黄河と呼ばれ、宋代以降に定着していった」（鶴岡，2007: p. 4）と述べているが、この記述に依拠するならば、殷周期においては、現在考えるよりもさらに大きな役割を水に期待してもよさそうである<sup>3)</sup>。殷周時代より、華北の諸王権が旱地農法に依拠していたのかどうか、問題はオープンになったままであろう。上述したように、大規模水利の跡を発見するのが重要なのではない。古代農業がどの程度水利に依存していたのか、あるいは諸王権が依拠したのは、水利農業であったのか、それとも旱地農業であったのかの問題なのである。特に、殷周期に大規模水利を問う必要はない。理論的には、第一次農地における国家の成立で、十分である。

筆者は、この第一次農地にもとづく邑制国家の成立以降の、中国古代の水利農業の発展を二系列に分けて考察しようとする。一つは、より大きな水利事業の展開による、第二次農地成立への道である。もう一つは、水利農業を踏まえながら、華北における乾燥化に対応した、より少ない水で可能な旱地農法成立への道である。これは、ちょうど、石井米雄の水利をめぐる工学的適応と農学的適応に相当する<sup>4)</sup>。すなわち、第二次農地への道は、堰や水路、あるいは堤防の築造など、力をもって水を制御する工学的適応の道であり、旱地農法への道は、自然に従い、その自然の特性にあった農業への転換、すなわち農学的適応の道である。そして重要なことは、工学的適応の道も、農学的適応の道も、同じ水利社会において生じたということである。その点

において、長瀬守がいう畑作を行なう華北も水稻農業の華中・江南も、同じ水利文化圏に属するとする東アジア水利農業文化圏説は妥当であると考ええる。旱地農法、とくに『斉民要術』に代表される旱地農法は灌漑農法と無縁ではない。旱地農法は水の節約を旨とし、基本的には水利農業の延長であろう。

次に、このような水利を通じた王と農民の関係において、王の良民・公民に対する支配権が確立したことを考えると禹の洪水神話が何時成立したのかが重要となる。岡本秀典(2007)によれば西周期には、この神話が基本的に成立したとみなせそうである。この神話の成立こそ、土地と水が王の所有であることが確立したことの証であろう。禹の神話の成立と流布は、王が大地(耕地)の創造者として、土地と水の所有者として、その土地を耕し、水を利用する共同体農民に、賦役を命じるイデオロギー的な権力を与えるものである。すなわち、この神話成立期に、あるいはそれ以前に、水利が農業にとって必須だった時代があったことを想定すると同時に、この神話の流布を支えた社会もまた、農業にとって水利が極めて重要であった社会であったと想定しうることになる。

さて、最後に、アジア的生産様式の成立にとって、水は主要な契機ではあるが、水が全てではない。先ほど、王の農業生産に対する責務というのは、西欧のマルクス主義者にとっては、アジア的な響きがあると述べたが、さらに、共同の備蓄をあげなければならない。話を先どりすれば、インカ時代、土地は三分され、国家宗教の、インカ王の、そして残りが農村共同体(アイユ)の土地として分けられ、それぞれ、農村共同体の共同労働(アイユ)によって耕されたが、その収穫物は祝祭や救恤に使われたという。ゴドリエによれば、これもまたアジア的生産様式にもとづく社会の出来事なのである。そうなれば、我々はやはり、籍田や耦耕といったことを、その視点から再考すべきであろう。大規模灌漑がないから、アジア的生産様式ではない、あるいはアジア的国家の成立とは認めがたいというのは、あまりにも、通俗的な理解にもとづくものである。

## 2 中南米

水と政治支配の結びつきは、アジア的社会に顕著なものであった。マルクス主義の創始者たちは、アジア的社会にメキシコやペルーをも含めており、南北アメリカの古代文明において、水が如何なる役割をしていたのか、あるいはしていなかったのか、やはり検討してみたいと考える。

アメリカ古代文明における水と政治支配の関わりが問題となったのは、ウィットフォーク『オリエンタル・デスポティズム』（1957）以降のことであった。ウィットフォークは、その大著のなかで、インカ帝国、アステカ・メキシコ連合を、中国、インド、メソポタミア、エジプトなどの古代文明などと同じように、水力社会であると述べている（マヤ文明については、水力社会としては周辺的な存在と見ているようである）。すなわち、一般の水利社会とは異なる大規模な灌漑・治水事業を営むべく、より強力な政治権力が生まれたと認識していた。このウィットフォーク仮説は、古代メソアメリカをフィールドとする考古学者たちを強く刺激した。サンダーズとプライス（Sanders & Price, 1968）は、灌漑がメキシコ盆地の国家形成に大きな役割を果たしたと主張した。だが、ウィットフォーク理論をメキシコ盆地<sup>5)</sup>に適用することに対しては、メキシコ盆地の灌漑システムが小さすぎて、ただ食糧供給部門を支える程度のものにすぎず、それゆえ水利システムは複雑な官僚階級による管理運営を必要としなかったし、それをめぐる抗争や競争を刺激することもないとの批判が起きた。サンダーズ（Sanders, 1976）は、このような批判に対し、反批判を提起しようとするものであった。

テオティワカンやアステカといった古代メキシコ文明を代表する国家を生んだメキシコ盆地の水利システムについて、サンダーズは様々な検証を試みており、そこから古代社会を支える水利の重要性を丁寧に解き明かそうとしている。だが、彼があげる二つのタイプの灌漑システムのうち、泉を水源と

する灌漑は小規模なものであり、また盆地を囲む峡谷・急斜面 (barranca) からの水流を利用した洪水灌漑 (溢流灌漑) にしても、それほど大きなものではない。またそれに必要な水路にしても、長い延長をもつものではない。そのほか、テスココ湖畔におけるチナンパや、テスココ湖周辺に広がる低湿地帯における排水の整備などいずれも水利に関わる事柄であり、メキシコ盆地の農業および食糧生産にとって重要であり、かつ、そのような水利施設の建設や水利事業のためには多くの農民を動員せざるをえなかったとはいえ、それらはみな、大規模な土木事業を伴うものではなかったと思われる。

1970年代以降も、メキシコ盆地の水利をめぐる議論は続いたと思われるが、その後も、サンダーズやプライスの主張を強く支持するような、あるいはまた、ウィットフォーゲル仮説の実証に必要な、大規模水利の遺構がみつかったわけではなかった。それゆえ Scarborough (2003) は、サンダーズやプライスの議論は不十分なものであり、水力仮説を実証したものではないと述べ、むしろ彼らの実際の考古学的作業にもとづかない主張が、メソアメリカ古代史研究に混乱をもたらしたとして、否定的に見ている。青山和雄 (2007) も、メソアメリカの灌漑について、マヤにしても、テオティワカンやアステカにしても、灌漑システムはいずれも小規模なものであり、灌漑理論は当てはまらなないと、何度か強調しているが、その背景には Scarborough と同じ見方があるのかもしれない。それに対し、スミス (Smith, 1996) は、サンダーズのウィットフォーゲル理論のメソアメリカへの適用の試みは、その後のフィールドワークや比較研究を強く刺激したと述べ、さらに、現在、ウィットフォーゲル理論をそのままの形で受け入れるものは少ないが、それにもかかわらず、多くのものが灌漑農業と政治権力の集中化の間に強い機能的関連が存在していることを認めている、と付け加えている。

青山和雄 (2007) は、ラテン・アメリカ特有の水上耕地、チナンパのアステカにおける展開について「チナンパは、メキシコ盆地の淡水湖において、首都で増大する食料受容に対応すべく、アステカ王国が一五世紀から造成し



た、大治水事業であった。大河川流域ではなく、しかも王国が発展した結果、造成されたのであり、灌漑理論はあてはまらない」（青山，p. 222）と強い口調で述べている。ここでの灌漑理論とは、もちろん、ウィットフォーゲルの水の理論である。

だが、冷静に考えれば、この大治水事業のため農民あるいは部族の民を動員する権力はどこから生じてきたのであろうか。当然、強力な国家が成立したからである、というのが答えであろう。だが、すべての初期国家、あるいは発達した首長制が、同じように、自らの部族成員や共同体農民に労働を強制する権力を所有していたのではない。少なくとも、マルクスが古典古代的共同体とかゲルマン的共同体と呼んだ人々の世界では、首長や王は、同一共同体のメンバーに労働を強制することはできなかった。国家が成立していないからできなかったのではなく、国家が成立した後もできなかったのである。それゆえ、古典古代世界の知識人は、バルシアやエジプトにおいて公民や良民が、公共事業のために労働を強制されているのを見て、かれらは自由民ではない、と考えたのである。

メキシコ盆地に成立した国家が、土木事業のために臣民を動員しえたこと、それもまた一般的な初期国家の成立とは別に説明しなければならない事柄である。さらに、いえば、ウィットフォーゲルの水力社会（専制国家）であれ、青山のメキシコ盆地やユカタン半島の諸王国であれ、いずれも、同じ共同体成員、同じ部族の民、あるいは公民や良民に、王や皇帝が公共事業のために労働を強いる体制には異なることがないという点に、今一度、注意を向けなければならないと考える。

ペルーの古代文明については、古代メキシコと同じく、マルクスやエンゲルスも、アジア的社会の関連から言及しており、その後も民族学・人類学あるいは古代史や国家論に関心のあるマルクス主義者にとっては、注目すべきテーマであった。1960年代初期以降、アジア的生産様式論争の再開を提唱

したフランスのマルクス主義者の一人であったモーリス・ゴドリエは、アジア的生産様式の典型の一つとして、インカ社会を取り上げ、その社会構成を論じている。ゴドリエにとってアジア的生産様式の本質とは、「一方では、土地の共同占有が支配的であり、部分的にはまだ親族関係を土台に組織されている未開諸共同体と、他方では、この諸共同体の現実的ないし想像的統一を表現し、本質的な経済資源の利用を統御し、自分の支配する諸共同体の労働と生産物の一部を直接的に領有している国家権力との、結合された存在にほかならない」(ゴドリエ, 1976: p. 204)。そこでは、土地所有はいまだ共同体的な所有が支配的であり、土地私有は存在しない。それにもかかわらず、小共同体の上に聳え立つ上位の共同体(包括的統一体: 具体的にはインカ国家)は、諸共同体の共同労働(賦役)と、同じ諸共同体からの貢納を基本的な収取の手段としていた。とくに、征服者としてインカ国家においては、各共同体に割り当てたインカの土地および神の土地における、共同体成員の共同労働(共同体のための賦役労働)こそが、インカ社会の生産様式の土台であった。いまだ土地私有が存在しない段階における、貢納や賦役を差し出す側と、それを受け取る側の対立、支配と被支配の成立。その意味で、この生産様式は、階級のない社会から階級社会へと到る過渡的な性格を持つと、ゴドリエは述べる。この共同労働こそ、灌漑や段畑をつくるための大規模な生産労働なのだが、ゴドリエはこの生産様式においては、水は本質的な契機ではない、と強く否定する。ゴドリエによれば、「水利労働であれ他の労働であれ、大規模な生産労働および非生産的労働は、未開共同体を支配する国家権力出現の、可能な土台のうちの一つにすぎ」ず、さらに「ある社会が『アジア的生産様式』に属するかどうかは、だから、中央権力が指揮する大規模労働が存在するかどうかではなく、主要な生産手段を集团的に占有しながら、しかもその終極的な統制権が国家の手中にあるかどうかに、かかっているのである」と述べ、大規模労働の存在もまた、アジア的生産様式規定の主要な要因ではないと(pp. 204-205)とまで言い切っている<sup>6)</sup>。

ペルー文明、とりわけインカ帝国との関係において、水利を社会発展の重要な要素として論じているのは、ムラー（1980）である。ムラーはマルクス主義的な生産様式論あるいは社会構成体論に極めて接近したアプローチを採り、インカ社会の生産力および生産関係の発展を論じている。ゴドリエのアジア的生产様式論にムラーのインカ経済組織の研究は影響を与えている。ゴドリエ（1976）やEich（1982）が強調するように、共同体農民による貢納と賦役（共同体のための賦役労働）こそ、インカ帝国の収取の根本にあったものであった。それゆえ、インカ生産様式と社会構成体はまさに、アジア的生产様式の一つのモデルとなりえたのである。

アンデス文明と水利の関わりについては、アンデス高地ばかりではなく、ペルー海岸地方を含め、アンデス文明を構成している様々なエコシステムの相関に目を向けている山本紀夫（2004）の記述を参考にしつつ概観を得たい。古代ペルー文明の二つの中心地、アンデス高地とペルー海岸地帯のうち、水が必須であったのは、降雨量が少なく、乾燥した海岸地帯であった。海岸地帯に興亡を繰り返した古代文明、モチェ、ナスカ、チンチャ、チムーなど、いずれも灌漑によって農業を支えていた。主要な作物はトウモロコシやマニオクだったと考えられている。ペルーに到来したスペイン人の多くをまず驚かせたのが、乾燥した海岸地帯に広がる灌漑水路であった。ペルー北部海岸地帯に建設されたモチェでは、大土木事業が行われ、その灌漑施設が残されているが、その一つチカマ川のラ・クンブレ運河は、全長が110キロメートル以上に及んでいる。アンデス高地から流れ落ちる河川の水を利用し、灌漑水路を張り巡らし、砂漠を耕地に変えたのである（山本、p.105）。その後、北部海岸に築かれたチムー王国の首都チャンチャンは、モチェ溪谷に置かれていた。また、南部海岸地帯のナスカでは、蒸発を防ぐため地下水路（puquio）が築かれ、ナスカの農業を支えていた。また、中部海岸においては、インディオが残した灌漑を、スペイン人たちが引き継ぎ、彼らの最初の都市リマを潤し続けたといわれる。

それに対し、アンデス高地において、文明の発生と水利の関わりは、海岸地方に比べ、それほど明確ではない。それというのも、アンデス高地の文明が依拠した主要な食糧は、一般に信じられているトウモロコシではなく、ジャガイモ、キヌア（アカザ科の雑穀）など寒冷高地に適した作物であった（山本紀夫, 2004: p. 124）からである。トウモロコシは基本的に温暖な低地に適した作物であり、ジャガイモが栽培化されたような高地では栽培できない（p. 83）。16世紀、征服者スペイン人たちは、「水が引かれていない限りトウモロコシの種が播かれることはなかった」と述べているように（p. 160）、アンデス高地におけるトウモロコシの拡大は、同じく高地における灌漑の発達と連動していたと考えられる。

トウモロコシ栽培がアンデス高地に普及しなかった理由は、寒冷高地であることのほか、雨期と霜の訪れる時期の間が短く、トウモロコシが成熟するには不十分であったことが挙げられる。それゆえ、成熟を促し、かつ霜害を防ぐためにも、灌漑が必要とされていた。だが、急峻な山地における灌漑は、両刃の剣でもある。すなわち、灌漑による土壌流出の恐れである。それを防ぐためにも、石などを用い、土壌流出を食い止めるだけの段畑をつくる必要があった。3,000メートルを越える高地に灌漑設備を築造することのほか、さらに切石を用いた段畑の造成のためには、多大な労働を必要とする。灌漑・段階耕作（terracing）・トウモロコシの結びつき（complex）（Guillet & Mitchell, 1994: p. 8）である。この膨大な労働の徴集と指揮を可能にしたもののこそ、インカ帝国の誕生であった。

ほぼそとした形でしか維持されていなかったトウモロコシ栽培が拡大されるようになったのは、インカ帝国の興隆と関わりがあると、ムラーに依りつつ山本は言う。「実際に、アンデスの山岳地帯におけるトウモロコシの大規模な栽培はインカ帝国の版図の拡大とともに広がったと考えられる。また、インカ時代の後期になって段階耕作の規模が大きくなり、切石を使った石積み技術も精巧になる。これは高度に中央集権化された政治組織の成立によっ

て大量の労働力を駆使し、大規模な土木事業が可能になったことを意味している（p. 290）。山本は、互酬性や再配分といったプリミティブな社会における交換システムに関する認識を踏まえつつ、インカが作り上げた労働制度や収取システムを果たした役割を「インカ王は権威によって集めた富を気前よく再配分することで多くの民族を味方につけることができたが、この再配分の中心となっていたものこそがトウモロコシであったと考えられるからである」（山本、p. 292）と述べ、トウモロコシが、インカ帝国の成立ではなく、その拡大に大きな役割を果たしたらしいことを認めている。

これまで、述べてきた大規模な「共同体のための賦役労働」は、ほぼ水をめぐるものであった。だが、アンデス高地の大規模な賦役労働は、水を契機として生じたものかどうか定かではない。灌漑のまえに、すでに農村共同体の共同労働は存在していた可能性もある。それが、アジア的生産様式を論じる際における、高地アンデス社会の、特徴といえるであろう。アンデス文明の「はじめに神殿ありき」とは聖書をもじった泉靖一の言（大貫ほか、2010: p. 95）であるが、もし神殿をめぐる経済が神への奉獻のみならず、共同体農民の救恤や飢餓への備えをも含むものであったなら、共同労働の契機となった可能性がある。我々の水の理論において、共同体のための必要労働、あるいは共同体のための賦役労働——すなわち社会的必要労働——は、治水であれ、灌漑であれ、水利のための労働が中核に存在した。アンデス高地のプリミティブな社会においては、その主要な食糧を構成するジャガイモの生産やキヌアなどの採取は、本来、水利を伴うことはない。ただ、ティティカカ湖畔の都市ティワナクにおいて、レイズドフィールド（raised field）と呼ばれる一種の灌漑農耕が行なわれていたが、そこではジャガイモが植えられていた可能性がある（関雄二、2010）。海拔 3800 メートルの高地にあるティワナクの巨大な建造物は、いうまでもなく、レイズドフィールド造成と同じく、農村共同体の共同労働で建設されたものである。水路建設にせよ、その補修にせよ、あるいは年ごとの川浚え、畔なおしにせよ、農村共同体の共同労働

なしには成立しない。それゆえ、共同労働の慣行と水利建設を、ほぼ同時に発生し、かつ互いに作用し合って、維持発展してきたものと考えたくなるが、神殿建設に象徴される共同労働の発生の方がかなり早くから先行したものである。人口の増加を促した、あるいは人口増加に対応した食糧の増産のための、急峻な山地における階段耕作については、農村共同体の共同労働とそれを大規模に動員・指揮する指導体制が不可欠だったと思われる。

この種の共同労働は、狩猟社会における共同狩猟、焼畑耕作における共同の火入れや共同耕作など、人類の歴史においては、かなり早くから成立していたと考えられる。ただ、共同労働が少数の支配者のための賦役体制に繰り込まれ、かつその体制の下、長期にわたって存続することを考えると、この種の労働のかなり特殊な性質を考慮にいれざるをえない。何故ならば、一般の共同労働は、たとえば収穫物の不公平な分配のように、労働に見合わない成果や報酬に結果する時には、いつも、容易に、個々の家族の労働に解消されるからである。すなわち、我々が一般に想像しうる共同労働は、独自の、敵対的な、生産様式の中核的な収取にまで発展することはない、と考えられる。それゆえ、アジア的生産様式論——それを敵対的な生産様式として理解する場合——においては、水が契機となる共同労働に注目が集まることになる。

アンデス高地における水利について、おそらくは1980年以降、大きな注目が集まるようになったと思われる。それは、東南アジア、南アジアらの、水利に対する関心が高まったのと同時期であったと考えられる。Mitchell & Guillet (1994) からは、多くの生態学や人類学、あるいは地域研究をフィールドとする研究者たちが、アンデス各地、各峡谷の水利について、それぞれ、継続的なフィールドワークを行なっていることがわかる。なかでも、クスコ盆地の王権と水の関わりを論じている Sherbondy (1994) が興味深い。アンデス高地のクスコは、大帝国内への発展前のインカにとって重要な食糧基地であり、農業生産はクスコ盆地の灌漑によって支えられていた。その灌漑シ

システム（とくに水源や水路）はインカ独得の宇宙観（方位観）に結び付けられており、それがまた政治や行政のモデルともなっていた。土地に対する権利は水に対する権利に依存していた。それゆえ、個々人は、水路建設およびその維持管理を担う農村共同体（アイユ）の一員として、水に対する権利を保有していた。インカの創生神話において、Inca Rocaの妻となった Mama Micayの最初の行動が、日照りに苦しむクスコに灌漑の水を送ることであった。さらに、クスコへの水源は、彼女の国の Lake Coricocha からインカの王によって作られた秘密の地下水路を通して流れ込んでいると信じられていた (Sherbondy, 1994: p. 81)。同じように、灌漑路や排水路もまたインカ草創期の王たちによって作られたと伝えられていた (p. 82)。そこから、インカの王が土と水の所有者であると信じられ、さらに水路を増設し、段畑による階段耕作を拡大させるために、王がインカの民に賦役を課すことがイデオロギー的に正当化されることになる。スペイン人はクスコ征服後も、インカ時代の水利システムを彼らなりに踏襲した。征服者であるスペイン人たちにとっても、それ以外の方法で、アンデス高地において食糧を確保することが難しかったからであろう。また、インディオから貢納を取り立てるためにも、灌漑システムは維持されなければならなかった (p. 87)。

考古学をフィールドとするウィリアムズ (Williams, 2006) は、アンデス文明の灌漑と政治支配の結びつきに関して、「ウィットフォーゲルの水力仮説は灌漑システムが複雑な政治システムへの発展をもたらす主要な力だと規定した。ほとんどの研究者たちが、その主張を退けたにもかかわらず、農業生産における技術革新、農業システムの強化、より複雑な社会-政治形態への発展などが、同時に生じたことは、世界の多くの地域において、報告されている。南アメリカ西部の尾根、とくにペルー、ボリビア、チリの乾燥した砂漠と高原は、これらの相互関係を検証する理想的な場所である」と、興味深い見解を述べている。さらに、ウィットフォーゲル理論に、エスター・ボズラップ (『農業成長の諸条件』) の経済発展に関する議論を結び付け、「土

地の希少性を伴う農業景観における人口増大の圧力は、灌漑を含む農業システムの強化を導く。これらの強化された新しい灌漑システムは管理者に効果的な操作を求め、灌漑官僚制度の成長は国家機構の発展を招くことになる」と概括している。

### 3 ヨーロッパ

これまで、アジア的社会における水と政治支配の関わりを検討してきた。コロンブス以前のアメリカ大陸の古代文明を営んできた社会をマルクスの言うアジア的社会であるかどうかについては、様々な議論があると思われるが、上述のごとく、筆者は、水と政治支配という点に関しては、マルクスの「アジア的社会」に属するものとして捉えうと考えている。では、それらに対し、非「アジア的社会」における灌漑・治水は、政治支配とどのような関わりにあるのであろうか。非「アジア的社会」における水と政治支配の関係の歴史を知ることは、逆に「アジア的社会」とは何かを、より良く知る助けになるはずだと思われる。

マルクスは、アジア的社会と西欧社会の水の在り方について、以下のよう

に述べている。

天候と地形上の条件、とくにサハラからアラビア、ペルシア、インド、タタールを経て、アジア最高の高原にまでひろがっている広大な砂漠地帯のために、運河と用水とによる人工灌漑が、東洋農業の基礎となった。エジプトやインドと同様、メソポタミア、ペルシアその他でも、洪水を利用して土地を肥沃にし、高い水位を利用して灌漑水路に水を注いだ。このように、水を節約して共同につかわなければならない根本的な必要から、西洋では、フランドルやイタリアの例のように、私的経営が自発的な連合を結ぶのが促進されたが、東洋では文明があまりにも低く、ま



た地域があまりにも広大で、自発的な連合を生み出さなかったため、とうぜん集中的にはたらく政府権力が介入することになった。ここからして、一つの経済的機能、すなわち公共事業をおこなうという機能が、あらゆるアジアの政府に帰した」。(マルクス「イギリスのインド支配」『マルクス＝エンゲルス全集』第9巻、p.123)

この著名な一節において、西欧における水利事業の典型として、マルクスはフランドルとイタリアの例を挙げている。1850年代の西欧において、水利と農業の顕著な結びつきを代表する地域として、おそらくフランドルとイタリアはよく知られた存在であったのであろう。では、フランドルとイタリアの例は、どの程度まで、アジア的社会との質の違いを明らかにしてくれるのであろうか。

Ciriacono (2006) は、ベネチアおよびオランダの水利事業に関する著作であり、時期区分としては、近世以降、ほぼ産業革命期まで、もっとも大きな関心は近世ベネチアの水利事業に向けられている。同書を貫いているのは「オランダの『黄金の時代』においてでさえ、オランダ自体においても、その他のヨーロッパの地域においても、私的な会社組織が沼沢地へ向けた資本のメイン・ソースであったことは疑いない」(Ciriacono, 2006: p. 14) といった著者の捉え方である。実際には、国家あるいは諸政体もまた沼沢地の干拓には関心を寄せていた。耕地が増えれば、農民も増えるからである。だが、問題は、それを実行するかどうかは、国家や公共団体が資本をもっているかどうかにかかっていた。経済の下降に従い、私的投資家たちが干拓への関心を失うのと反比例して、国家がその役割を増大させることもありえた。

近世ベネチアにおいて、人口の増加、およびオスマン帝国の台頭と、そこからの食糧輸入の困難さが増すにつれ、耕地拡大への意欲が増した。そこに、有力な主穀として水稻が加わる。ポー川流域における米作は長い伝統があるとはいえ、麦作が主流である西欧において、水稻を営むというのは、おそらく

くムギ類に比し、コメの、種子に対する収穫の多さ、耕地当たりの、土地生産性の高さが、投資家たちの投資意欲をかきたてたのであろう<sup>7)</sup>。

ベネチアにおいて農地のために水を要求したのは大土地所有者＝土地貴族であった。大規模な事業は土地所有者がコンソーシアム (consortium) をつくって対応した。彼らは、自らの収益の拡大のため、経営のための投資として水に投資した。もう少し具体的にいえば、土地貴族たちは、農業用水を、原料や機械に向けたのと同じように、明確に配分された投資の一環として、購入したのである。

だが、ベネチアにおける水利は、ラグーン (lagoon, 潟) との関わりが重要であった。ラグーンの現状を変えることにつながるような水利事業は認められなかった。土地貴族は、様々な用途において高まる水需要のなかで、自らの農地への給水を確保しなければならなかった。

西欧の灌漑農業における水と政治支配の関わりを明らかにするには、より相応しい例を検討する必要がある。まずは、治水に関するオランダの例である。オランダの干拓地における農業は、一度干拓が成功するや、水をつねに供給する必要はない。すなわち、灌漑農業ではない。ただ、海面より低いオランダの干拓地においては、治水事業こそ生命線であった。この治水のための自治組織が13世紀にできたウォーターボードであり、幾つかの農家があつまり堤防を造り、相互に責任を負っていた。ウォーターボードは、その代表ダイクグラーフを選んだ。人々は堤防管理の費用を税金として支払った。堤防と水の前では人々は平等で民主的であり、ウォーターボードは世界でも初期の近代的な民主主義的自治組織となった (長坂寿久, 2007: pp. 51-52)。アジア的社会における水と政治支配の結びつきとはまったく対蹠的な世界がここにある。

さらに、西欧的な水と政治支配の在り方を示すものとして、グリック『中世バレンシアにおける灌漑と社会』(Glick, 1970) は、現在のところもっと

もすぐれた著作である。

バレンシアの灌漑地はウエルタ *huerta* と呼ばれた。ほとんどのウエルタはバレンシア市およびそれぞれの町の管轄のもとにあった。町の人間は城壁の外に灌漑農地をもち、主穀やブドウを植えていた。バレンシアの市と町は、都市およびその管轄下にある土地（農地）に対し、司法権（*jurisdiction*）を有していた。市や町が新しい水路 *canal* を築く場合、議会あるいは行政当局は、そこに明確な司法権を確立した。アラゴン王のもとにあるバレンシアの、最終的な司法権はアラゴン王に属したとはいえ、実質的にはバレンシア市や町が保有していた（国王からの特許状を得ていた）。それゆえ、王は、アジア的社会の王のように、灌漑の発展のために投資しようとしなかったし、またそれに統制を加えようとしなかった（Glick, 1970: p. 95）。灌漑のための投資は主に土地所有者のグループがカンパニーを作って行うものが主体であり、町は市民が負担できないほどの規模の灌漑計画にのみ関与した。具体的な水路の掘削工事は、人手を集め賃金を払って行われ、石灰岩、砂やレンガなどの必要な資材もまた金銭をもって調達している。灌漑プロジェクトにおいては賦役 *corvée* はほとんど用いられなかった。特にバレンシア市においては賦役ではなく、賃金による雇用を好んだといわれる。ただ、緊急時（洪水により主要な水利施設が破壊された時など）には、賦役に頼る場合、あるいは賦役に頼る町があったようである。

名称については様々な差違を含みながらも、一般には、地域的な灌漑機構の責任者は *sobrecequier* と呼ばれ、個々の水路の管理者は *cequier* と呼ばれていた。*sobrecequier* は、市の役人であった。ウエルタ全体に関わる灌漑の問題についての司法権は *jurate* によって執行された。*jurate* は市の行政官であった。*sobrecequier* と *jurate* の職務や権限の間には、重複する部分があり、それゆえ、時には *sobrecequier* が存在しない場合もあったようである（pp. 34-36）。*cequier* はそれぞれの灌漑コミュニティの全体集会によって選ばれたものたちであり、*sobrecequier* あるいは *jurate* の司法権に

従っていた。14-15 世紀には、市の議会 (council) と jurate は、ウエルタ全体の水利権の保護者であったが、cequier がその決定から排除されていたわけではなかった。次第に、具体的な経験と知識を有する cequier の重要性が増し、cequier の集会や委員会がウエルタの水利に関する集団的決定において重きをなしていく。それらは後のバレンシア市の水利法廷 (Tribunal of waters) の前身をなすことになる。

バレンシア市などの水管理は郊外の水車場、製粉場 (mill) や大農場主の水要求とは摩擦を起こしがちであった。水不足の年には、具体的な抗争となって現れた。バレンシア市側にとっては、市民へのパンの確保のためにも、市のパン製造業者に粉を供給する製粉場に優先的に水を供給しなければならなかった。水をめぐる最大の抗争は、1413 年に生じた。三人の貴族 (Lord) がバレンシア市に優先権がある水路の水をより多く自領に流そうとして、市の jurate および水利機構と衝突した。その時のバレンシア側の対応がとても興味深い。市は jurate 等の報告を聞くや、大土地所有者から市の水利権を守るため、100 名の騎兵と 1,000 名の歩兵を募集することを決定し、市やウエルタ中を触れ回らせた。騎兵には 1 日 5 スー (sous)、歩兵には 3 スーの手当てが 3 日分用意され、広場に集まった義勇兵には市の役人 (jurate や justiciar) から前もって支払われた。武力衝突を前に貴族たちはすぐに和解を求め、市の決定を尊重することを誓い、保証人 (質) を市に差出した。貴族たちが強気に出た根拠は、国王フェルナンド一世 (1412-1416) からの書状であったが、市議会は彼らの根拠が国王の手紙を恣意的に理解したものと断じ、貴族たちにはもともと存在しない権利を主張しているとしてその要求を退けた。その翌日、市は国王 (フェルナンド一世) へ手紙を送り、経過を報告したが、その時、ハイメ二世 (1291-1327) のバレンシア市への特許状については、触れなかった。触れる必要もないと考えていたのであろう (pp. 141-143)。

同書で述べられている中世バレンシアの灌漑機構の在り様は、我々が知る

ものと大きく異なる。灌漑コミュニティのそれぞれのメンバーや灌漑コミュニティ自身の権利が、cequier や sobrecequier あるいは jurate の司法権のもと統括され、守られている（当然、権利に対しては相応の義務が課せられている）。これは、西欧における放牧地や草地、森林などの共有地（コモンズ）を管理運営するやり方と同じだと考えられる。司法権相互にはヒエラルヒーが存在し、そのなかで、位階に応じた決定がなされる。その決定は位階に応じた効力を有す。そして、この司法権は最終的にはアラゴン王の特許状によって保証されている。

いわゆるアジア的社会において、このような中世バレンシアの灌漑システムの在り方にもっとも近いのは中世日本の灌漑システムであろう。いずれにせよ、中世日本においても、共同体の水利をめぐる諸権利は、上級所有権を持つ権門からの支持（様々な諸権利の授与）抜きにはありえなかったであろう。だが、日本中世と大きく異なるところもある。異なる点は、中世日本においては、大小さまざまな支配者が保持していた大権は、司法権（裁判権）というより勸農権であった。すなわち、これまで何度も述べてきたように、共同体のための必要労働もしくは共同体のための賦役労働を徴集し、指揮する権限である。

アジア的社会とは、この共同体のための必要労働および共同体のための賦役労働を収取の基礎としていた。すなわちゴドリエがいう諸共同体による共同労働である。公共事業とは、この共同労働によって担われる。国家が成立した後、この共同労働は賦役となる。国家成立以後のアジア的社会の水利事業が、賦役として現れるのは、それゆえである。

中世バレンシアの灌漑システムにおいては、賦役はほとんど用いられていない。この点において、アジア的社会の灌漑システムとは大きく異なる。なぜ、賦役をほとんど必要としなかったのであろうか。また、中世バレンシアにおいて、たとえば、新たな水路を築造する場合、まず、それが個々人あるいはグループとして行う場合においても、あるいは町や市が行なう場合にお

いても、投資として行われた。先に一定の資本が準備され、それによって人を雇い、資材を購入して、建設されたのである。そのようなことは、一定程度、アジア的社会においても行われるかもしれない。だが、アジア的社会においては、人を動員するのに、あるいは物資を調達するのに、予め資本があるかどうかは、状況次第である。勤農権の保持者は、仮に資本が準備できなくとも、あるいは十分な資本がなくとも、農民を動員し、物資を調達することができる。もし、事前に手元に余裕があれば、労働者に報酬を払うこともあるであろうし、物資に代価を払うこともありうる。少ない元手しかなければ、少なく払うことで済ませるであろう。

中世バレンシアのようなやり方では、灌漑が一举に広がることはない。オランダの干拓地のように、ゆっくり拡張しうだけである。そこにバレンシアの灌漑システムの特異性があるように思われる。つまり、バレンシアにおいては、もっとも元手がかかる最初の灌漑施設の築造、灌漑システムのための基盤づくり、すなわち大がかりな初期投資を行なったのは、中世バレンシア人ではなく、それ以前の、アラブ人、ムスリムであったということである。ムスリムが一応築き上げた灌漑施設を、キリスト教徒であるバレンシア人が引き継いだ、それゆえ、大がかりな初期投資をしなくて済んだと考えられる。

バレンシアの灌漑の起源については、アラブ起源説、ローマ起源説など諸説があり、19世紀以来、議論が続いている。特に問題とされているは、中世バレンシアの灌漑システムは、その骨格を、ウマイヤ朝によるスペイン征服後、アラブ人によって築かれたかどうかである。グリックは、後ウマイヤ朝、あるいはその後のイスラム政権、そしてアラゴン王国のもとでの、バレンシアにおける水利建設に連続性を認めているようである。すなわち、バレンシアの水利建設は後ウマイヤ朝以来、徐々に行われたのであって、ウィットフォーゲルの水の理論が想定するような大規模公共事業の展開は、いずれにせよ中世バレンシアには妥当しないと考えている。

だが、グリックは水利建設が大規模かどうかには捉われていないように思われ

る。イスラム系の王国はいずれも征服王朝であり、征服地は征服者の所有に帰した。かつ、ウマイヤ朝は西アジアの出自であった。オリエン特諸国家が公共事業のために臣民に賦役を強制する大権を所有していたように、スペインのイスラム国家もまた、臣民に賦役を課すことを当然とみなしていた。後ウマイヤ朝崩壊（1032年）以後、スペインのイスラム国家は分裂を深める。だが、地域ごとに成立したイスラム諸小王国を封建化したと考えることはできない。というのも、それらの小王国もまた、君主と臣民の関係においては、従来と変わることがなかったと思われるからである。変化は、たとえばバレンシアのように、レコンキスタ以降、生じたのである。

#### 4 小 括

さて、前々稿（No. 476）、前稿（No. 485）を含めた、若干の総括を行ってみたい。筆者は、前々稿の冒頭において、水利システムの規模について考察した。共同体もしくは共同体連合によってコントロールしうる水利システムの規模を小規模とし、デスポティズム（東洋的専制）を成立させる水力社会のシステムの規模を大規模とした。その中間のもの、共同体や共同体連合のコントロールを越えてはいるが、デスポティズムもしくは水力社会を成立させるほど大規模ではないものを、中規模とした。

ここでいう水利システムの規模とは、地理的な広さにはある程度関係はあるが、それを直接意味するわけではない。その社会がもっている技術水準、あるいはマルクス主義者がいう生産力の水準が高ければ、地理的な広さは克服する可能性が高い。重要な点は、いつの時期に、どの程度の技術的な水準において、どの程度困難な課題に立ち向かうかである。一番わかりやすい例を挙げれば、産業革命の高い技術段階以降においては、広大な地域の灌漑や治水は、必ずしも中央集権的な統制がなければ建設できないわけでも、維持できないわけでもない。また、仮に大規模水利事業を中央政府の強力なリ-

ダーシップによって推進し、その後中央集権的な機構によって管理・維持したところで、それは社会の一部にすぎず、既存の政治システムの変更——多少の影響は出るかもしれないが——に結びつくわけでもない。だが、逆に、産業革命以降の技術とシステムを、同時代の他の社会——たとえばアジア的社会——に移植する場合、往々にしてそれは——様々な開発独裁の例に見られるように——、集権的な政治システムへの変更、あるいは集権的な政治システムの強化を招く可能性がある。

本稿のテーマは水と政治支配の関わりにある。それゆえ、主要には、プリミティブな社会の段階における政治支配——具体的には初期国家——の成立、および専制国家成立に即して、水と政治支配の関わりを考えなければならない。具体的な例を挙げると、筆者が見聞した雲南大理地方北部の小さな盆地、下桃源壩子（バーズ、盆地）は、1.8 平方 km で、宅地以外はほぼ水田によって占められている。下桃源村の現在の戸数は 104 戸である。このような小さな盆地から、たとえ古代であっても、なにかしら政治支配のようなものが生まれるとは考えられない。周囲をほぼ山に囲まれ、また裏山にあたる部分には森があり、そこから、あるいは溪流から容易に水を引くことができる。つまり、重力灌漑による典型的なコミュニティ・ベースの灌漑システムであり、灌漑にせよ排水にせよ、水はコミュニティのコントロールのもとにある。

このようなコミュニティ・ベースの灌漑システムにおいては、コミュニティの成員は、互いに協力しあう関係にある。彼らは堰や水路の建設、あるいは季節ごとの水利施設の修理などに、共同で参加し、彼らの農業に必要な水の供給を受ける。応分の負担があり、応分の享受がある。このような水利建設およびその維持管理のための労働は、共同体のための必要労働にほかならない。

コミュニティ・ベースの灌漑において、メンバー相互のより緊密な協力を必要としているのが、雲南のハニ族、フィリピン・ルソン北部のボントク族、さらにバリ島の農業景観としてよく知られる棚田の水利システムである。棚



田の水利システムにおいては、水は水源から水路を経て田に達するが、その後は田から隣の田への、いわゆる田越し灌漑となる。棚田は、畔が崩れれば下の田に水と土砂が流れ込み、被害を大きくする。それゆえ、自分の田だけのことを考えて耕すことはできない。一般に水稻農業は、たとえ天水田であっても、集水域は必ず自分の田よりも大きく、水は他人の土地を経て自分の田に注ぐことになる。ゆえに、個々の農戸の自己経営といっても、他人との協力を欠かすことができない。そこがヨーロッパに典型的な小農民経営とは異なるところである。

このようなコミュニティ・ベースの灌漑においては、共同のことがらに対する成員相互の関わり方、働きぶりが、互いに手に取るようにわかる。そのことを協働連関の可視性と呼ぶ。平地の田に投下するよりも2、3倍といわれるほど苛酷な労働を強いられているはずの棚田が、近代に到るまで、比較的安定して維持されてきたのも、この協働連関の可視性に負うところが多いと考える。

クリフォード・ギアーツ『ヌガラ』を継ぎ、バリ島の灌漑組織スヴァクについて詳細なフィールドワークをおこなったランシング（Lansing, 1991）は、灌漑システムにおけるウォーター・テンブルの役割に注目する。ウォーター・テンブルは水利社会における宗教的な機能を司るのみならず、季節ごとの宗教行事に伴うスヴァクの寄合を通じ、スヴァク内のメンバー間の水配分をめぐる摩擦や、各スヴァク間の水をめぐる抗争を調整すると同時に、農業歴に合わせ農作業の進行をもゆるやかにコントロールしていた。さらに、最上位のウォーター・テンブル（the temple of the crater lake）およびその主宰者 Jero Gde は、首長や王といった「政治支配」との関係においても、微妙な距離を保ち、全体として灌漑システムが維持・発展していくように、その役割を果たしていた。そして、このようなバリ島の灌漑システムに内在している共同関係を、hydraulic solidarity と名づけた。筆者の協働連関の可視性は、たとえばプリミティブな社会における他の共同作業や共同事業、

たとえば、共同狩猟や焼畑における共同の火入れなどを含んで構想されている点において、ランシングの hydraulic solidarity とは異なる。ただ、協働連関の可視性も、hydraulic solidarity も、ともに、コミュニティ内部の関わり合いの在り方を表すとともに、コミュニティ間の共同関係をも表すものである。つまり、先ほどの下桃源壩子のような、小さなコミュニティ内の共同関係を表出するとともに、共同体連合によってコントロールされているような、あるいはコミュニティ・ベースの灌漑システムを幾重にも重ねたバリ島の灌漑システムの共同関係をも表しうる。

どの程度の広さがあれば、コミュニティのコントロールを越えるのかについては、その土地の気候、地形、地質、植生、主穀の種類、利用しうる水の多様なあり方、その社会が持つ技術水準や歴史的経験など多数の要因が絡んでおり、一義的に決められない。首長制から初期国家へのプロセスに関わる例としては、中国西南からインドシナ北部にかけての河谷盆地や山間盆地において水稻農業を営むタイ系諸族を例にとると、ほとんどは 100 平方 km 以下の盆地における水稻農業であり、大きなものでも、たとえば、シーサンパンナの最大の盆地といわれる孟海盆地は、229 平方 km である。だが、その大きさは三つの盆地が繋がっているものを一つの盆地として数えているからである。景洪盆地は 76 平方 km にすぎない。また、ランナー王国を生んだチェンマイ盆地は京都盆地（270 平方 km）よりも一回り大きいと言われている。ちなみに、中国西南の古代国家滇国を生んだ昆明盆地は 770 平方 km、南詔・大理を成立させた大理盆地は 350 平方 km ほどであり、日本古代国家の首都であった奈良盆地（450 平方 km）や京都盆地とほぼ同じか、一回り大きい程度である。

そして、これらの古代国家あるいは初期国家の経験から言えることは、このような盆地、小平野に成立した首長国や初期国家の場合、水に関する関与の程度については、それぞれ違いがあるにせよ、基本的にはコミュニティ・ベースの灌漑システムを維持しつつ、それらに依拠して収取を行なっている、

という点が共通している。国家が、たとえ水利事業に積極的に関与したとしても、コミュニティ・ベースの水利の在り方を大きく変えるようなことはしない。たしかに、国家成立以後、共同体のための必要労働は、共同体のための賦役労働として、王および王の代理人（官吏）によって強制されるものとなった。それゆえ、王の支配地域における人民の徴発とそれを使った公共事業は、当然にも王の認可なしには不可能であり、その意味での国家の関与は必ず存在したであろう。また、各水路間の、あるいは灌漑区ごとの水争いなどに関しては、当然、より上位にある国家機関が調停を行ったであろう。しかし、たとえ村落の手に余るような水路の掘削に国家が関与した場合においても、新たに開発された土地を王の直轄地にし、王直属の官僚を派遣し、王の政治意志を反映させた直接統治を行なう、などといった、中国古代における戦国時代から秦漢までの、郡県制の施行に向けた趨勢のような、支配システムの変化は生じない。あるいは外部からの影響などによって一時生じたとしても、永續しない。もし、新たな灌漑地を直轄地として官吏を送り込んでも、いずれ土着し、豪族化する。このような盆地や小平野を基盤にした政治権力は、盆地内の地域ごとの政治勢力に依拠して初めて安定した政権たりうるものであり、また、盆地・小平野に跨る政権も、個々の盆地・小平野の政治勢力に依拠してのみ政権たりうるからである。

それゆえ、このような盆地や小平野では、政治的にも経済的にも、限られた資源しか獲得しえない。このような地域では、首都の盆地は、他の地域に対し相対的優位にあっても、絶対的優位を確立することはできない。それゆえ、中央政府は地方政府に対し、あるいは諸部族に対し、さまざまな妥協をせざるをえない。

上述のごとく、コミュニティ・ベースの灌漑システムは、その水利施設の築造と維持・管理は共同体のための必要労働によって担われた。国家が成立した時、それらの水利施設は公おおやけのものとなった。また、共同体のための必要労働は共同体のための賦役労働に転化した。それが、専制の萌芽ではある

が、だが、あくまでも萌芽にすぎない。初期国家においては、水利システムは依然としてコミュニティ・ベースのシステムに依存するほかなかったからである。先ほどの専制の萌芽が、実際の専制の成立に至るまでには、コミュニティのコントロールが到底及ばないような、システムの大規模化や外部機構化——コミュニティにとって水利施設や水利機構がまったく疎遠な存在になること——のほか、長期にわたる歴史的なプロセスが必要であった。

結局、専制国家生成と深く結びついた大規模水利事業というのは、古代文明や古代専制国家を発生・成立させたような大河地域にこそふさわしい。このような大河流域あるいは大平原における水利事業は、灌漑であれ治水であれ、個々の地域（個々の灌漑区や治水区）の利害をほとんど考慮せずに、中央政府およびその官僚層の政治意志や利害にもとづいて進められる。個々の灌漑区や治水区の農民たちは、ただ、物資の調達を命じられ、事業の現場へ動員される対象にすぎない。また、大規模な水利施設、大きなダム、長くかつ運河のような幅広い水路、長大な堤防などは、個々のコミュニティのものでもなければ、コミュニティのコントロールがおよぶものでもない。それらはすべて王のものであった。そして、その築造のために人民はただひたすら動員され、使役されるだけであった。

さらに留意されるべきは、大河および大平原によって、主穀の首都への搬送が容易であるということである。国家の直接手元に多くの食糧が集まれば集まるほど、それが容易に集めることができればできるほど、国家は臣民の意志に左右されずに、国家意志を発動することが可能となる。それはまた、臣民のあずかり知らぬ決定をも可能とするという意味で、国家支配を人格的に体現する個々の王や皇帝の恣意性が増す過程でもある。すなち、中国の歴代王朝における漕運と運河建設は、水の理論と無関係なことなどではなく、それ自身において、アジア的社会の特質を帯びたことがらなのである。

これまで、本論文全体を振りかえり、水と政治支配の関わりの多様性を再

認識すると同時に、また、政治支配における水の契機の重要性もあらためて認識することとなった。そこにおいて、問われるべきなのは、むしろ、古典古代世界や中世西欧世界における、水と政治支配の結びつきの在り方であろう。オランダや中世バルセロナの水と政治支配の在り方と、我々がアジア的社会と呼んでいる世界でのそれと大きく異なることについては、先ほど見たところである。そして、そこにおける所有の在り方の違いが問題となる。それは、土地私有が確立した社会における水と政治支配の関わりと、土地私有がなかなか確立しえないアジア的社会における水と政治支配の関わりとの相違、というべきものであろう。それが、一方では、王権に抗する土地所有（土地私有）を意味し、一方では土地私有の未成立もしくは王権に依存した土地私有に繋がるのである。

最後に、西欧のマルクス主義の、アジア観にも——オリエンタリズム、ヨーロッパ中心主義批判に留意しつつ——耳を傾けてみよう。ヴァルガが、農作物の豊凶を予想し、備蓄に努めるのはアジア的社会の王たるものの責務であるとみなしたことは、すでに述べた。ヴァルガだけでなく、テーケイやシェノーといった当時のマルクス主義者もまた、そこにアジア的な社会の響きを感じ取ったのである。この責務こそが、アジア的社会における王の政務として勸農であり、そのために臣民を賦役に駆り立てる権限、勸農権が生じたのである<sup>8)</sup>。逆に豊凶の責めは王にはなく、それは気候によりけりであり、究極的には神に帰すると考えるヨーロッパの歴史には、勸農や勸農権という発想自体が存在しない（土地私有を尊重する裁判権が存在する）。では、ヨーロッパの君主は農事に関心がなかったのであろうか。関心は存在したであろう。だが、それは自己の収入増を期待した所領の経営として存在したのだ。それと、アジア的社会における君主の勸農とは異なる。勸農という発想には王の臣民に対する責務、民生への配慮が存在する。すなわち、王は何とかがして民を食わせなければならない<sup>9)</sup>。王が、民生を配慮し、水を巧みに制御し、共同の備蓄を主導することと、臣民が様々な形で、共同体のための賦役労働

に服し、王都への主穀の搬送を担うこととは、おそらく、どこかで、釣り合っていると、古代の、アジア的社会に生きる人々は考えたのであろう。

### 《注》

- 1) 原文は中国時代。文脈上から印刷ミスと判断した。
- 2) 「国家は、偶発的な凶作にそなえる食糧の備蓄に配慮する。バイブルの有名な伝説によれば、ヨセフは、豊作の七年のあとには凶作が七年続くから、豊作の七年の間に食糧の備蓄をおこなうようにとファラオに助言したといわれる。この伝説は、疑いもなく、バイブルがつくられた頃にアジアの生産様式がエジプトにおいて存在していたということを反映している」(ヴァルガ「アジアの生産様式について」福富正実編訳『アジアの生産様式論争の復活』未来社、1969年)。
- 3) 後代のことになるが、長瀬守(1983)によれば、宋代になっても華北には大きな沼沢地帯が残っていた。五代から北宋期にかけ、渤海、滄州から白洋淀、保定まで、塘泊が連なっており、契丹(遼)の侵攻に対する重要な防衛線となっていた、と述べている。華北の生態的環境の歴史的変遷が、明らかになる日を期待したい。
- 4) 石井米雄のユニークな水利論については拙著前々稿、『明治大学教養論集』No. 476を参照されたい。
- 5) メキシコ盆地の大きさは、8,000平方km(あるいは9,600平方km)とされ、我々が知っている盆地、たとえば日本や中国西南から東南アジアにかけての盆地で、古代国家を生んだ盆地の大きさが、奈良盆地、京都盆地、大理盆地(南詔・大理)、チェンマイ盆地(ランナー王国)らがいずれも、300平方kmから500平方kmくらいであり、大きくても770平方km程度(古代滇国を生んだ昆明盆地)であるのに比し、規模において極めて大きな盆地であることがわかる。因みに、中国古代文明の発祥地の一つ、渭水盆地(関中)は東西300km、南北100kmである、正確な面積は不明だが、おそらく15,000平方km前後と考えれば大過ないであろう。
- 6) 重要なことは、ゴドリエは水の理論に反対である、ということである。ゴドリエにおいては、水管理は国家機能のなかの一つにすぎない。だが、これは、アジアの生産様式論争再開にあたって、自らのアジアの生産様式論を、ウィットフォーゲル水の理論から、可能な限り切り離しておきたいと考えていたゴドリエの、苦心の、戦略的な理論配置——自らの理論を多数ある理論のなかの、どのような位置に存在せしめるかといった意味での理論配置——と言った方が正しいと考えられる。水の理論が反共理論であり、反マルクス主義であると考えられている以上、当時のマルクス主義者にとって水の理論との類似は致命的結果をもたらす可能性

が高かったからであった。

- 7) 興味深いのは、ベネチアにおいて、「健康に害をもたらすから」という理由で、医者や学者が水田の拡大に抗議したとあることである（Ciriaco, p. 31）。
- 8) ヴェルスコップ、シェノー、ゴドリエなどが、生産の組織者、推進役としての国家を、アジア的なものとみなしたのも、この勸農権の行使に気付いたからである。
- 9) 両者の農業への関心の相違が、現在の経済学に対する二つの世界の味方に繋がっている可能性を指摘しておきたい。土地貴族にせよ、領主にせよ、自己（自分の家）の収入を増大せしめること、それが西欧の労働生産性重視に繋がったのではないか（良民を簡単に使役することはできなかったがゆえに）。すなわち家政（オイコス Oikos）→経済学である。他方、多数の臣民の腹を満たそうとすることが、アジア的社会における土地生産性の重視に繋がったのではないか、すなわち経世済民→経済学である。

#### 参考文献

- 青山和夫 2007 古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ文明  
講談社選書メチエ
- 天野元之助 1958 中国古代デスポティズムの諸条件 歴史学研究 第9期 No. 223
- ウィットフォージェル 1991 オリエンタル・デスポティズム 湯浅赳男訳 新評論
- 大崎正治 1987 フィリピン国ポントク村 村は「クニ」である 農村漁村文化協会
- 大貫良夫ほか 2010 古代アンデス 神殿から始まる文明 朝日出版社
- 岡本秀典 2007 夏王朝 中国文明の原像 講談社学術文庫
- 織田武雄他 1976 西南アジアの農業と農村 京都大学
- 小野泰 2011 宋代の水利政策と地域社会 汲古書院
- 木村正雄 1958 中国の古代専制主義とその基礎 歴史学研究 第3期 No. 217
- 木村正雄 1959 中国古代専制国家の基礎条件 歴史学研究 第3期 No. 229
- 木村正雄 1965 中国古代帝国の形成 不昧堂書店
- 木村正雄 1979 中国古代農民叛乱の研究 東京大学出版会
- 小嶋茂稔 2009 漢代国家統治の構造と展開 後漢国家論研究序説 汲古書院
- ゴドリエ 1976 人類学の地平と針路 山内昶訳 紀伊國屋書店
- 佐久間吉也 1980 魏晉南北朝水利史研究 国書刊行会
- 関雄二 2010 アンデス考古学 改訂版 同成社
- 谷口義介 1988 中国古代社会史研究 朋友書店
- 谷光隆 1991 明代河工史研究 同朋社
- 玉城哲 旗手勲 1974 風土 大地と人間の歴史 平凡社

- 玉城哲 1976 風土の経済学 新評論
- 玉城哲ほか 1984 水利の社会構造 国際連合大学
- 中国水利史研究会編 1981 中国水利史論集 国書刊行会
- 中国水利史研究会編 1984 中国水利史論叢 国書刊行会
- 長江水利史略編集組 1992 長江水利史 高橋裕監修 鈴木孝治訳 古今書院
- 鶴間和幸編 2007 黄河流域の歴史と環境 東方書店
- 長坂寿久 2007 オランダを知るための60章 明石書店
- 長瀬守 1983 宋元水利史研究 国書刊行会
- 浜川栄 2009 中国古代の社会と黄河 早稲田大学出版部
- 原宗子 2005 「農本」主義と「黄土」の発生 古代中国の開発と環境2 研文出版
- 藤田勝久 1983 漢代における水利事業の展開 歴史学研究 第10期 No. 521
- 藤田勝久 2005 中国古代国家と郡県社会 汲古書院
- ベヴィラックワ 2008 ヴェネツィアと水 環境と人間の歴史 北村暁夫訳 岩波書店
- 星斌夫 1963 明代漕運の研究 日本学術振興会
- 森田明 1974 清代水利社会史研究 亜紀書房
- 森田明 1990 清代水利社会史の研究 国書刊行会
- 森田明編 1995 中国水利史の研究 国書刊行会
- 森田明編 2002 清代の水利と地域社会 中国書店
- 望月清司 1971 「共同体のための賦役労働」について 専修大学社会科学研究所月報 No. 88
- 望月清司 1973 マルクス歴史理論の研究 岩波書店
- 山本紀夫 2004 ジャガイモとインカ帝国 東京大学出版会
- 吉岡義信 1978 宋代黄河史研究 御茶の水書房
- 渡辺信一郎 2010 中国古代の財政と国家 汲古書院
- Bunker, Stephen G. (2006) *The Snake with Golden Braids: Society, Nature, and Technology in Andean Irrigation*, Lexington Books.
- Ciriaco, Salvatore (2006) *Building on Water: Venice, Holland and the Construction of the European Landscape in Early Modern Times*, Berghahn Books.
- Eich, Dieter (1982) *Ayllú und Staat der Inka: zur Diskussion der asiatischen Produktionsweise*, Vervuert.
- Gelles, Paul H. (2000) *Water and Power in Highland Peru: The Cultural Politics of Irrigation and Development*, Rutgers University Press.
- Gibson, McGuire (eds.) (1974), *Irrigation's Impact of Society*, The University of Arizona Press.



- Glick, Thomas F. (1970) *Irrigation and Society in Medieval Valencia*, Belknap Press of Harvard University Press.
- Hillel, Daniel (1991) *Out of Earth: Civilization and the Life of the Soil*, University of California Press.
- Hillel, Daniel (1994) *Rivers of Eden: The Struggle for Water and the Quest for Peace in the Middle East*, Oxford University Press.
- Kolata, Alan (1986) The Agricultural Foundation of the Tiwanaku State: A View from the Heartland, *American Antiquity*, Vol. 51, No. 4.
- Kolata, Alan (1991) The Technology and Organization of Agricultural Production in the Tiwanaku State, *Latin American Antiquity*, Vol. 2, No. 3.
- Maass, Arthur & Anderson, Raymond L. (1978) ... and the Desert Shall Rejoice: *Conflict, Growth, and Justice in Arid Environments*, The MIT press.
- Mays, Larry W. (ed.) (2010) *Ancient Water Technologies*, Springer.
- Mitchell, William P. & Guillet, David (eds.) (1994) *Irrigation at High Altitudes: The Social Organization of Water Control Systems in the Andes*, American Anthoropogical Association.
- Lansing, J. Stephen (1991) *Priests and Programmers: Technologies of Power in the Engineered Landscape of Bali*, Princeton University Press.
- Lucero, Lisa J. & Fash, Barbara W. (2006) *Precolombian Water Management: Ideology, Ritual, and Power*, The University of Arizona Press.
- Murra, John (1980) *The Economic Organization of the Inca State*, Jai Press Inc.
- Nwa, E. U. (2003) *History of Irrigation, Drainage and Flood Control in Nigeria: From Pre-Colonial Time to 1999*, Spectrum Books Limited.
- Sanders, William T. (1976) The Agricultural History of the Basin of Mexico, Eric R. Wolf (ed), *The Valley of Mexico: Studies in Pre-Hispanic Ecology and Society*, University of New Mexico Press.
- Sanders, William T. & Price, Barbara J. (1968) *Mesoamerica: The Evolution of a Civilization*, Random House.
- Scarborough, Verno L. (2003) *The Flow of Power: Ancient Water Systems and Landscapes*, A School of American Research Resident Scholar Book.
- Schreiber, Katharina & Rojas, Joué Lanco (2003) *Irrigation and Society in the Peruvian Desert: the Puquios of Nasca*, Lexington Books.
- Sherbondy, Jeanette E. (1994) Water and Power: The Role of Irrigation Districts in the Transition from Inca to Spanish Cuzco, William P. Mitchell & David Guillet, *Irrigation at High Altitudes: The Social Organization of Water Control Systems in the Andes*, American Anthoropogical Association.
- Smith, M. E. (1996) The Aztec Silent Majority: William T. Sanders and the

Study of the Aztec Peasantry, In *Arqueologia Mesoamericana: Homenaje a William T. Sanders*, Vol. 1.

Squatriti, Paolo (1998) *Water and Society in Early Mediaval Italy, AD 400-1000*, CambridgeUniversity Press.

Williams, P. R. (2006) Agricultural innovation, intensification and sociopolitical development: the case of highland irrigation agriculture on the Pacific Andean watersheds, *Agricultural Strategies*, Marcus, J. and Stanish, C. (eds.), Cotsen Institute of Archaeology, UCLA, Los Angeles, USA, 309-333.

Worster, Donald (1985) *Rivers of Empire: Water, Aridity, and the Growth of the American West*, Oxford University Press.

(ふくもと・かつきよ 商学部教授)